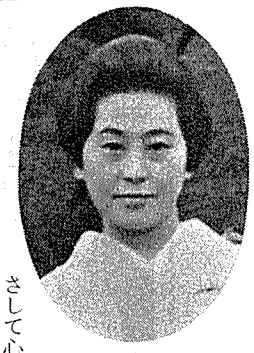
清友会報
発行所
清友会編集部
神戸市東灘区本山町
清友園内
電話　㊽ 2626番
振替　神戸 13512番

御挨拶

会長　阿部登喜



積極的に着々と万事を進めてこられ、同窓会の基礎を固められました前会長乾様の後を引うけて一年、周囲の皆様方のお力に助けられて、至らぬ乍らどうにかつとめさせていただきました。この間例の女子四年制大学の設置について会員御一同様の御協力を得まして、予定額の二倍を上まわる成績をあげ得ました事、ただただ皆様方の一方ならぬ御尽力の賜とあつく御礼申上ます。

全国に否遠く海外にさえ散ばっている甲南の同窓生、それは相当な世代の隔りをもち、お互いに顔も名も知らない人もあります。何所かで打鳴らされた一つの音が四方に拡がってゆくにつれ、どこからともなくあちこちからそれに共鳴して応える声。そしてやがて一つの大きな楽となって鳴りひびいてゆく——それは何という力強い美しい響きでありましょう。同じ学舎で同じ甲南精神に育くまれてきたものの連帯性——一つのよびかけがどのような大きな力に実ってゆく事か——その具体的な現れを目のあたりにして驚きと共に実にたのもしい思いを強くしました。

「同窓会」今まで何げなく口にし目にも読みながら、さして心にとめても思わなかったこの言葉の実質性を、今更ながら考えさせられました。そう思い到る時、これは私が皆様の前に立ってお礼を申上げる事ではなく、同窓会のひとりひとりが互いに手を取りあって喜びあうべき事なのだ。そしてそれが本当の同窓会のあり方なのだと思いました。

人の和。温いひびきをもつこの言葉。この頃の私達をとりまくあわただしい世界。かわいたメカニックな響きの中に、ともすれば喪失し断絶しそうになる人間の心、精神をそうした渦の中からとり戻し、互いにしっかりつなぎあわせてこの世の中に光をさしそえる事こそ、私達女性のつとめではないでしょうか。

人の和。この言葉を今一度めいめいの胸の裡に甦えらせ思いを深めて味っていただきたいと思います。

乾前会長の御努力によりよい会館が建ち、厚生部、給品部、事務部共に円滑に運営されて中々の成績をあげております。月に一度幹事会も開かれ、時に頭の痛くなるような議事も、和やかな雰囲気の中にどしどし意見を出しあって進められ、適確な解決をみております。そして今は同窓会の内部が一応整ってきた段階にあります。今後は一歩前進して本当の意味の同窓会の事業というものがもたれてゆくのではないでしょうか。その手はじめとして、前からの念願でもあった会報が先づ発行されました。同窓会は一部の人のものではなく同窓生皆のものなのです。会員ひとりひとりが会と密接なつながりをもつべきでありましょう。その意味に於ても会報は、同窓会の色々な動きを皆様に伝える機関として、必要でもあり意義あるものと存じます。今後も定期的に発行してゆきたいと思って居ります。どうか皆様からも会の事につきまして御意見なり何なりおよせ下さいませ。

この節は会館にお泊りの方もちょいちょいあり、中々好評のようでございます。せいぜい御利用下さいまして、同窓会の一端にも直接ふれていただきたいと存じます。

尚会館の備品その他につきましても皆様から数々の御好意をよせられ、おいおいと整って参りました。心より御礼申上げますと共に何卒今後ともよろしくお願致します。

◇　◇　◇

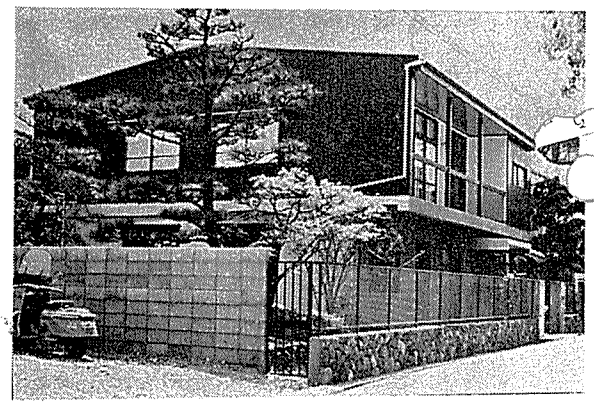
甲南女子大学の建設について

学長　山本栄喜

甲南女子大学の建設については、同窓会の方々に多大の御協力御援助を頂いて、深く感謝しています。このたび同窓会報が発刊されるのを機会に、その建設情況を報告して、感謝の意を表したいと思います。

先づ大学の建設で、最も重要なことは、その大学の目的、性格及び使命であります。甲南女子大学の目的は何か、その教育精神は、そしてその内容は何であるかということが、同窓のみなさんの共通の関心事であろうかと思います。あるいは、甲南女子学園に大学が必要であるかという疑問をお持ちの方もないとはいえないかとも思います。理事会も当初は短大の新築移転程度に考えていました。ところが昭和三十六年の夏から是非四年制大学をという熱烈なる要望が父兄生徒の間に滲漸として起り、理事会も時代の趨勢を見、三十年、五十年後の甲南の将来のことを考え、甲南女子大学の建設を敢行することになったわけでございます。

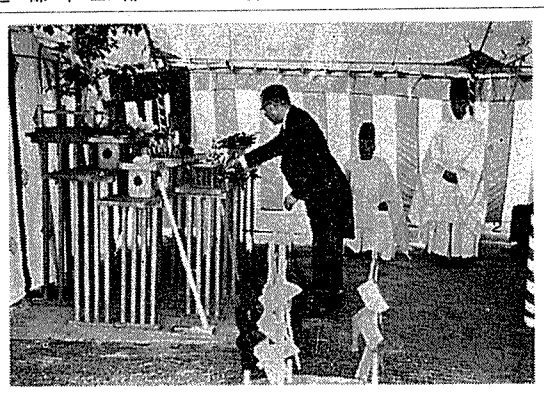
そこで甲南女子大学の目的や性格でございますが、これは申すまでもなく、甲南の建学精神と四十余年の伝統の下に立てられる女子大学であり、総合学園として、甲南の女子教育を人格的に知的に肉体的に完成するものであります。学部は第一期は文学部を設置し英文学科と国文学科の二科目を置く。家政は同所に校舎は新築移転するが差当り短大のままにしておく。学生定員は英文学科、国文学科ともに四百名で、計八〇〇名、短大家政科が二百名で全体で千名の定員にするというのが大体の構想であります。学生数千名というのは大学としては極めて小規模で、経営は楽でないかと思いますが少数の学生に対して個性尊重の教育を行うという、甲南伝統の精神を堅持したい考えであります。



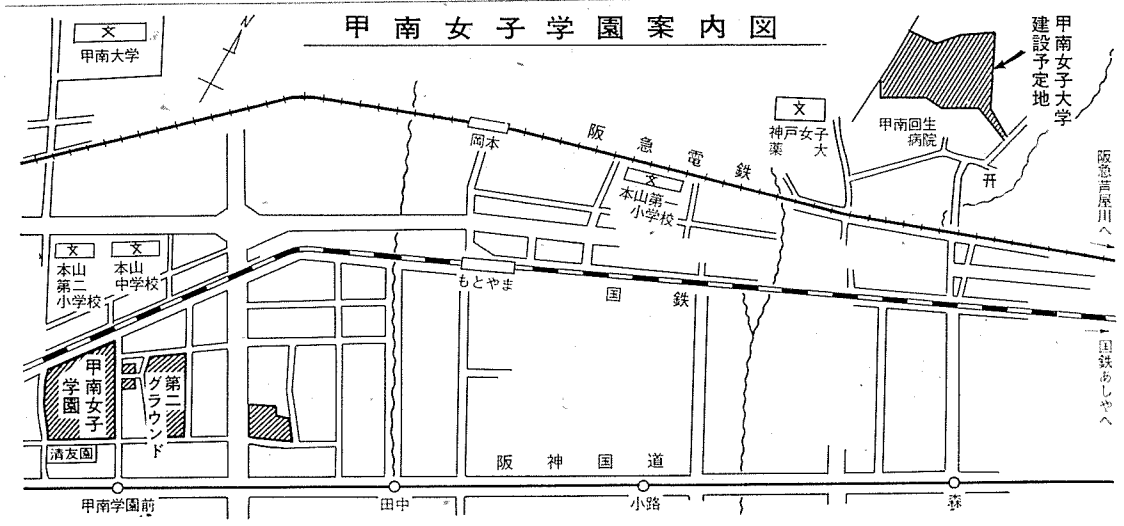
清友園新館

甲南大学建設に当って、現実に最も苦心し苦労したのは、校地の選定買収と、資金の調達とであります。校地は当初現在の校舎校地の隣接地の買収に当ったが、なかなか困難であった。そこに大学の建設とたれば少くとも一万坪以上の土地が必要である。一年以上の歳月を費し、苦心惨胆の末入手出来たのが、昨年十月買収した土地である。これは同じ神戸市東灘区本山町の森坂下というところで、森の天神の真上、もと広岡氏邸のあとで、日生住宅が住宅地として造成していた土地が大部分であります。面積は一万二千坪、海抜七十メーター、背後は六甲山麓の緑におおわれ、前にひぬの海原をのぞみ、神戸、尼崎、大阪方面を一望の中におさめる、閑静で実に風光絶佳の地であります。おそらく今日御影から芦屋西宮間の阪急沿線で残されていた唯一の地であったと思い、これが確保出来たことは天の恵みという外なく、しかし実際には阿部理事長を始め猪崎、鷲尾理事の献身的な努力と日生住宅の清水社長の並々ならぬ御厚意によるものであることを永く銘記せねばならないと思います。

昨年十月買収完了と同時に校舎の建築設計を村野、森設計事務所に、工事を大林組に依頼しました。建築する校舎は管理棟（二階）講堂と一般教養棟（二階）図書館と研究室棟（二階）文学部棟（三階）家政学部棟（三階）と学生会館（二階）の六棟で総建坪延三千余坪になります。従来阿部理事長は事前に質素を旨として学園の管理運営を図って来ましたが、ここのたびの女子大学建設については、少くとも西日本においては恥づかしくない、甲南の名にふさわしい建物にしたいという御考で、他の理事者も亦同じ理想で考えられたので、村野藤吾氏の設計と、天下の大林組の施工であるので、景勝の校地とマッチして素晴らしい校舎が建つであろうと思います。計三億二千七百万円に達する巨額の御協賛を得ることが出来ましたことに有難いことで、私等は勿論、阿部理事長始め理事者一同深く感謝しているところであります。



（起工式）

甲南女子大学建設について御報告申上げることがらは大体以上のとおりでございます。

思いますに甲南女子学園は終戦の年全校舎を戦災で失い、それから約十年間戦災復旧に血のにじむ努力を積み重ねて中高の校舎も一応復旧し短大も誕生しました。しかし中高の校舎も半分はなお木造であり、それも相当いたんで来、狭く事多難であります。しかし之等の難問題を解決して甲南百年とはいえないが此後三十年、五十年後の発展の計を成就することがいわば甲南の悲願であると思います。この機を逸して安易の道についたら悔を千載に残すことになりはしないか。この一事を思って、理事者も、今回の女子大学の建設について非常の決意をされたのであります。そして私も不敏ながらこの一事のために懸命に努力しております。甲南精神の保持者である清友会会員お一人お一人に対し、此後持続的な支持と援助を切に切にお願いして、私の報告と致します。